

2.話したい内容(詳細)

【a. 作中の登場人物の描かれ方の違い】

a-1、過去が描かれる男性、描かれない女性、そしてその理由

a-2. ピニオンとレッドが向き合う「過去(責任)」のありようの違い

a-3.第4話にて、主人公の「待機し続ける」をエイミーの弟ベベルが「生き続けること」と同じであるとしたのはどのような意味か？

a-4. 最終話にて、ベベルが「歴史学」ではなく、「考古学」という言葉で意図しようとしたこと

【b. 作品の骨子(テーマ)について】

b-1.各社会(銀河同盟、地球、ストライカーを偶像化する宗教集団)の違いについて

b-2.判断や選択にまつわる機械と人間の関係

(パイロット支援型のチェインバーとレッド、人類支援型のストライカーと共同体)

b-3.複数のテーマが読み取れる作品であるが、作品の骨子となるもの(テーマ)はなにか？

【c. 虚淵作品の傾向性について】

c-1.まどか☆マギカ、PSYCHO-PASS、翠星のガルガンティアからみえる虚淵作品の傾向性

c-2.ホラー映画としての虚淵作品(人格の急なる浮上、消失について)

【d. その他】

d-1.作品が面白かったか否かとその理由

d-2.どのキャラクターが好きかとその理由

d-3.(コメントのみ)第5話の「風の日」にみえる、サービス業労働

3.論評

□「翠星のガルガンティア」には反復される三つの要素があります。

1、男性と女性の過去の描かれ方の違い

男性→過去が描かれる(レド、ピニオン)

女性→過去が描かれない(エイミー、ベローズ、ラケージ)

※例外はベベルとリジット。

2、「まどか☆マギカ」にもみられた、人格の急なる浮上、急なる喪失ゆえの「戦慄」

cf. 人間とクジライカの関係 ⇔ 魔法少女と魔女の関係

3、「PSYCHO-PASS」と同様にみられる、人間が判断を放棄することで生じる、機械の特異点化問題、である。

以下で検討していく。

1、男性と女性の過去の描かれ方の違い

「翠星のガルガンティア」において、過去を生きるレドやピニオンという男性陣、今を生きる女性陣が対比的に描かれている。それは男性は過去を描くことで、女性にはそれが描かれないことで表現されている。(例外的に過去が描かれない男性としてのベベル、そして(テレビ版未放送話の)14話でリジットは過去(の恋心)が描かれる。)

過去の清算としての現在

作品の主要な登場人物であるレドとピニオンは過去に囚われて、現在の行動を決定している。

レド→当初は銀河同盟の任務の基にヒディアーズを殲滅しようとする。

最後には、同郷(銀河同盟)の成れの果てであるストライカーを殲滅するために自分の命を捨てて戦おうとする。

ピニオン→ピニオンはサルベージ中の事故で亡くなった兄の無念を晴らすため、

ヒディアーズの巣のサルベージを試みる(第9話「深海の秘密」)。

過去に兄を救えなかった自分を赦すため、窮地で仲間の船団員を逃がし、「逃げられる奴は逃げられるに越した事はねえよ。なあ兄貴、そう思うだろ？」(第13話「翠の星の伝説」)と語る。

男性の勝手な自己清算を批判する女性

しかし、これらの過去清算は、彼らを想う女性陣からすると、自分勝手な自己満足の行為にうつる。彼らのどこにもいかないような自己満足や自己犠牲を批判するのはいつも女性人であった。。※この女性の立場には、ベベルも含まれている。

○レドに対して

ベベル→「そんなことしなくたってレドはレドなのに…」(第7話「兵士のさだめ」)

エイミー→「どうして自分のこと、大切にしてくれないの…」(第8話「離別」)、

「だから、帰ってきて。あなたが守ろうとしてくれた場所に、
私たちのガルガンティアに」(第13話「翠の星の伝説」)

○ピニオンに対して

ラケージ→「自分勝手に格好つけしいの唐変木！四の五の言わずに、
展望台に出るのです！」(第13話「翠の星の伝説」)

以上のように、「…をすること」でしか、自己の存在意義を見いだせないものとして男性が描かれているのに対して、女性(+ベベル)は、ベベルの言うように「姉さんに必要とされている。(…)何より自分にとって自分が大事」というような「…であること」にも比重を置いている存在だ。

兄との約束を果たすことに夢中なピニオンは、ラケージの罵倒により、半分強制的に目の前の関心に引き戻され、一命を取り留める。レドはエイミーの存在により、彼女と生きたいと思うことが、結果的に彼の命を救った。

あったかもしれない過去に「泣く」

しかし、話はそのような「承認問題」(レドはレドでいいじゃん！)だけでは終わらない。レドの「過去」は、現にあった歴史だけではなく、「あったかもしれない」歴史にも向けられている。

レドは笛の音色を介して、理由のない涙を流す。それは「あったかもしれない」フィクションを想像し、その中に眠る弟に対して流される。また、銀河同盟と同根の歴史をもつかもしれないヒディアーズを殺したことに戦慄する(あったかもしれない虐殺に恐怖する)。

フィクションの中に眠る責任、いわば夢の中で請け負った責任をどのように解消していけばよいのだろうか。

考古学から系譜学へ

最終話のラストでベベルは教鞭に立ち、考古学の授業をする。考古学は、地球市民・銀河同盟・クジライカの三者が交換可能であった歴史に開いてくれる。そして、あったかもしれない歴史(夢の責任)を現に果たすために、レドは探検家として資料を集めて、クジライカとのまだ見ぬコミュニケーションの到来を想像しているのだ。

ベベルは、地球に残った祖先と、ヒディアーズになった者たち、そして、コンチネンタルユニオンとなった祖先が、互いに交換可能な歴史をもっていると示唆している。それは「もしかしたら、コンチネンタルユニオンに」、「もしかしたら、ヒディアーズに」になっていたかもしれない存在として、私たちの今や未来を考えることができるのだ。これは、人々に夢の責任を想像させ、フィクションの中で謝罪をする機会を提供することにあたる。

そして、レドは個人では果たせない夢の責任を現に果たすための方法として、クジライカとのコミュニケーションを夢見る。彼らとの対話が実現することで、夢の責任は現実のものになるかもしれないのだ。

このように、ベベルにとって歴史学ではなく、考古学的に語る必要があったのはまだみぬ「過去」や「今」に向けられた問いを提起するためだ。今ある関心のもとで描かれる歴史遡行では捉えられない「過去」は歴史学では救えない。しかし、新たな歴史学を作っていくのは考古学である(むしろ、幾つもの歴史学を併存させることができる、といったほうが正しい)。「未だ来ずもの」としての過去、すなわち、「未・来」にひらかれた過去の探究が考古学なのだ。

複数の歴史に開かれる地点を発見する考古学は、その後、系譜学へと発展していく。系譜学は、私たちの「生」を複数の可能性に曝し、フィクションの歴史を編む。わたしがクジライカで「あったかもしれない」歴史、銀河同盟で「あったかもしれない」歴史をからませながら、今の地球人の「生」や「倫理」を問うのだ。

2、人格の急なる浮上、急なる喪失ゆえの「戦慄」 + 3、機械の特異点化問題

2と3を一緒に問います。

□ガルガンティアには2点の要素があります。

- ①「まどか☆マギカ」のようなホラー要素と、
- ②「サイコパス」に似た SF 要素があります。

□ホラー要素としては、「人であること(=人格)」を支える条件がゆらがされる点があげられます。 cf. 魔法少女と魔女の連続的な関係

□SF 要素としては、思考や判断を機械にアウトソースしていくうちに変わっていく機械と人間の関係があげられます。cf. シビュラと人間の関係

□両者の要素を解決していくのは「考古学」と「共感」です。

□「考古学」はベベルが最後のシーンで教鞭をとる学問です。「考古学」が示すのは、わたしたちが疑わない「人間」や「人格」という範疇自体を偶然的なものであることです。

□「考古学」は「人間」や「人格」という観念を長い歴史のなかで、偶然うまれ、これから変わりゆくものとしてしか見なさない。

□「共感」は、エイミーら地球人の「共生」の姿勢の根本にある感情です。「共感」をした対象と「共生」しようとする態度は、相手が人間であるか否かは関係がありません。

□わたしたちは何かの基準で「共感」したりしなかったりするアンドロイドではないので、ぬいぐるみにもキャラクターにも「共感」し、同時にそこに魂を感じとるのです。

□以上のように「考古学」にて固定的な観念を脱臼し、その後は自分自身の「共感」感情をもとに、共生行動を行うことを本作品はレコメンドしています。

□当初のレッドは、敵を見いだすことによる連帯を尊重し、エイミーらを交渉の相手ほどにしか見ていなかった。エイミーらとともに過ごす中で、地球人の精神性である「共感」感情のもとに、共生行動を行おうとする態度に気が始める。(食べ物を取る行為、海賊との穏便な対応、クジライカとの共生など)。

□そして、クーゲル中尉の地球人類の啓蒙には疑義を唱えるのは、地球人の「共感」感情の複雑さに気づいてしまっているからだ。彼は銀河同盟の短絡的な関係性を「大義さえあればいい」と思っていた。それが機械じかけのニセモノでもまるで見分けがつけられなかった」と反省し、地球人を「そこにいる人たちの世界がある」(第12話「決断のとき」)と発言するのだ。

□最終話でレッドはガルガンティアを守るために、クーゲル中尉と戦おうとする。この際には、銀河同盟における命令関係の遵守ではなく、エイミーらのいるガルガンティアを守りたいという意志が優先している。

□しかし、彼の欲望はその先にある。「俺は死に方を分かっても、生き方が分からない…そんな俺のために、生き方を一緒に探してくれる人がいた。もう一度会いたかった、もう一度声を聞きたかった…」(第13話「翠の星の伝説」)。エイミーと共に生きたいと願うことが、彼のガルガンティアを守ろうとする動機であった。チェインバーは、そのような彼の新たな欲望の萌芽を見て、「(彼にとっての)より多くの成果」を修めるためにコクピットから追い出す。チェインバーはレッドをパイロットとして不適格であるといいつつ、それはレッドが「人間として」正義を発見しつづけたことに信頼を寄せているのだ。そこには人間と機械のありうべき関係を見ることもできる。

□「共感」という思考的慣習に素直にしたがうかぎり、人間が人間であることをの存在意義があるのかもしれない。本作品は「共感」という人間の作業から、遡及的に「人間であること」の条件を示唆しているともいえる。

4.添付資料

0 次元

【利益が「あったはず」なのに今は無い、という話＝0 次元】

社会の有用性から阻害されているために、社会を回復する話
在るはずの状態から乖離した状態(マイナス状態)を描写する事になる。

ex)『タッチ』、『あの日見た花の名前を僕たちはまだ知らない。』

1 次元

【利益の中に漂う(空気系)話＝1 次元】

空気を読めば、社会の有用性が「確定している」話
在るはずの状態が、在るはずの状態(ゼロ状態)として(あり得そうな悲哀を含めて)、
描写する事になる。

ex)『まどか☆マギカ』(友情ものとしてしか魔法少女性をかんがえていない、まみさん)、『けいおん!』

2 次元

【社会の利益とは別の「個的」な利益を充足しようと(社会的に(さやか)／個的に(杏子))格闘する話＝2 次元】

空気を読むだけでは足りず、個人としての価値を研鑽し、追求する話
在るはずの状態では不足し、それを超越する価値(プラス状態)の探求を描写する事になる。

ex)『まどか☆マギカ』(さやか、杏子)、『時をかける少女』

3 次元

【社会の利益とは別の「個的」な利益を充足しようと、現実の秩序の下で最適化戦略を模索する話＝3次元】

空気をもはや読まず、個人的な価値の実現の失敗(さやか、杏子)を、失敗に留まらせ
ない方策を、現実において採用する話。

ex)『まどか☆マギカ』(ほむら)、『スカイクロラ』

4 次元

【社会の利益とは別の「個的」な利益を充足しようとした上で、現実の秩序の再編成を模索する話＝4次元】

秩序自体の矛盾の無い生成に向かうため、設計の局所性に陥らない。

ex)『まどか☆マギカ』(神まどか)、『serial experiments lain』